

論文

モンゴル語古訳本『孝経』におけるモンゴル文語の表記の特徴

Some Features of Written Mongolian Scripts of the *Hsiao ching* (孝経)

栗 林 均
(東北大学)

KURIBAYASHI Hitoshi
(Tohoku University)

キーワード：孝経、モンゴル文語、モンゴル文字、先古典期モンゴル語、ローマ字転写

Keywords: the *Hsiao ching*, Written Mongolian, Mongolian script, pre-classical Mongolian, transcription

目 次

1. はじめに
2. 古典モンゴル語と共通の特徴
3. orkiča と čačulγ_a
 - 3-1. 2 種類の orkiča
 - 3-2. čačulγ_a
 - 3-3. orkiča と čačulγ_a の交替形
 - 3-4. 子音字 <n><d> および <g> <ng> の末位形
4. 子音字 <d> と <t> の字形
 - 4-1. 語幹内における <d> と <t> の字形
 - 4-2. 接尾辞頭における <d> と <t> の字形
5. 小結

1. はじめに

本稿の目的はモンゴル語古訳本『孝経』におけるモンゴル文語の言語的な特徴、とりわけモンゴル文字の字形と綴りといった表記上の特徴を明らかにすることである。ここでいうモンゴル語古訳本『孝経』は、中国故宮博物館所蔵の孤本として知られる漢蒙対訳の木版刷り全38丁の線装本である（以下『孝経』と呼ぶのはこの一本を指す）。『孝経』のモンゴル語に関しては、栗林（2014：

1-4)に先行研究のまとめがある。原本の影印はこれまで数種類のモノクロ版が公刊されているが、栗林(2014: 6-79)では実物大のカラー影印により原本の状態が忠実に再現されている。

『孝経』は14世紀前半に由来すると推定される。そこに記録されているモンゴル文語は、儒学の經典の翻訳という内容からしても、また38丁裏表(全75頁)の分量からしても、13～15世紀のいわゆる「先古典期モンゴル文語」の文献の中で比類のない貴重な文献資料となっている。木版印刷本『孝経』の保存状態は極めて良好であり、開板当時のモンゴル文語の字形や字画の細部に至るまで詳細に確認することができる。本稿では、こうした資料の特長を活かして、影印画像によって原本の字形や綴りを例証しながら『孝経』のモンゴル文語の表記上の特徴を明らかにする。

「先古典期」のモンゴル文語の字形や表記法に関する先行研究は少ない。Владимирцов(1929)は、16世紀末まで使われたとする「ウイグル式モンゴル文字」の字母表(69頁)を掲げ、文字表記の例を17世紀以降の「モンゴル文字」と対比させて説明している(72-84頁)。それ以後のモンゴル文語の概説書では、Владимирцовの字母表がほぼそのまま繰り返し再録されてきた¹。「先古典期」のモンゴル文語には、漢蒙対訳碑文、トゥルフアン出土文書、イルハン国王の書状といった多様な文献資料が含まれ、『孝経』もそのひとつに数えられる²。それらに記されているモンゴル文語の字形・字体、正書法は文献によって異なることから、それぞれの文献ごとに実態を明らかにしていく必要がある。

これらの中で、漢蒙対訳碑文の領域では中村・松川(1992)に少林寺聖旨碑のモンゴル文字と綴りの特徴に関して「(b) ウイグル文字モンゴル文面の特徴」(28-31頁)として簡潔ではあるが周回な記述があり、トゥルフアン出土文書の領域では Cerensodnom・Taube(1993)がモンゴル文字の字形と表記法の特徴をまとめている(10-11頁)。個別の文献として、松川(2004)は「如來大寶法王建普度大齋長卷画」(1407年)のモンゴル文語の字形と綴りの特徴を8項目にまとめている。

「先古典期」モンゴル語の特徴は、こうした個々の研究を統合して得られるものであり、『孝経』のモンゴル文語の表記の特徴を明らかにすることはその一環として位置づけることができる。

2. 古典モンゴル語と共通の特徴

Poppe(1954: 2-3)は、モンゴル文語における「先古典期(pre-classical period)」を17世紀初頭までとし、「古典モンゴル語(Classical Mongolian)」を16～17世紀の木版印刷の仏典の中で使用され規範化されたモンゴル文語としている。Grønbech and Krueger(1976: 5)が指摘するように古典モンゴル語は1720年の北京版カンジュールの改訂によって定着したといえることができる。

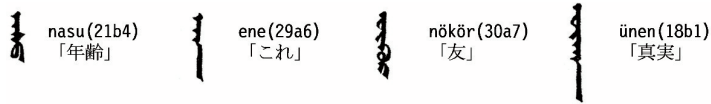
先古典期の時代にはウイグル文字の字形がほぼそのままの形で使われていることから「ウイグル式モンゴル文字」と呼ばれ、17世紀以降の「古典モンゴル語」を含むモンゴル文語に使われる「モンゴル文字」と区別されている。『孝経』のモンゴル語は典型的な「ウイグル式モンゴル文字」で綴られている。

まず、『孝経』と古典モンゴル語の字形の共通点として、以下に4点を取り上げる。

¹ Poppe(1954)など。

² Tumurtogoo(2006)は、ウイグル式モンゴル文語資料の集成である。

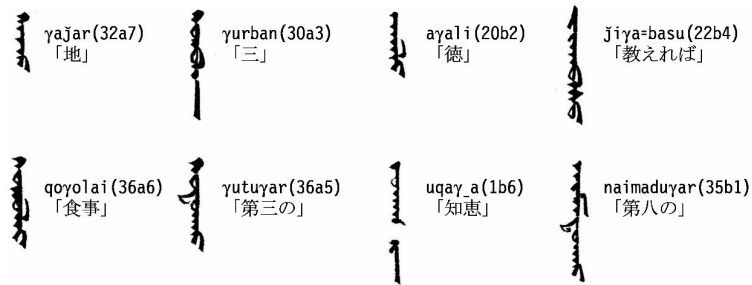
1. 子音字 <n> は、すべての位置で点の無い字形が用いられている。例：³



Poppe (1954 : 20) は、「古典モンゴル語」では子音字 <n> は母音字の前で点を持つ字形が使われるが、「古風な写本 (ancient manuscripts)」ではそうした位置にも点が無い字形が使われるとしている。ここでは、『孝経』と同様、Poppe が「古典モンゴル語」とするカンジュール等の木版刷り仏教経典の中で一般に使われているのは点のない字形であることに注意を払っておきたい。

「ウイグル式モンゴル文字」の字母表⁴の子音字 <n> の欄には、語頭・語中・語末で点のある字形と点のない字形が並置されており、先古典期モンゴル語で両方の字形が使われていることを示している。しかし、先古典期モンゴル語には多様な文献資料が含まれ、それらの字形・字体、正書法も文献によって一律ではない。『孝経』では子音字 <n> は一貫して点の付かない字形が用いられているが、トゥルフアン出土の『入菩提行経注釈』⁵は、点の付いた <n> の字形が頻出することで知られる。そこでは語頭・語中・語末の位置で点の付いた字形が散見されるが、それと並んで点のない字形も多数用いられている。「ウイグル式モンゴル文字」の字母表に二つの字形が示されているのは、先古典期の文献の中にそれらの字形が使われている例があるという意味で理解しておく必要がある。それらがどのような文献でどのように用いられているかは、個々の文献を調査することによって明らかにしなければならない。

2. 子音字 <y> は、すべての位置で点の無い字形が用いられている。例：⁶



Poppe (1954 : 21) は、子音字 <y> に関しても、「古典モンゴル語」では母音字の前で 2 点の付いた字形が用いられるが、「古風な写本 (ancient manuscripts)」では 2 点が省かれ、その結果 <q> と同形になると説明している。この場合も『孝経』と同様に「古典モンゴル語」で一般に使われているのは、単語の中の位置に関係なく 2 点をもたない字形であることに留意しておきたい。

³ 例のローマ字転写に出現位置を付す。出現位置はカッコに入れ、丁数、表 (a) 裏 (b)、行数を示す。(21a4) は、第 21 丁表の第 4 行を指す。丁数は、原本版心にある漢数字の丁付けによる。

⁴ Владимирцов (1929 : 69)、Poppe (1954 : 26)、道布 (1983 : IX)、『蒙汉词典 增订本』(1999 : 1515) 等。

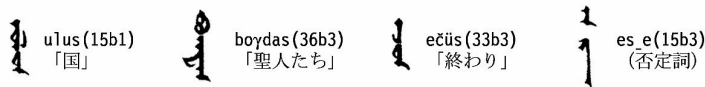
⁵ bodisdw_a čary_a awatar-un tayilbur, Haenisch (1954)

⁶ ローマ字転写の中の「=」(等号記号) は、動詞の語幹と接尾辞の境界を表す。

「ウイグル式モンゴル文字」の字母表⁷の子音字 <γ> の欄には、語頭・語中・語末で点のある字形と点のない字形が並置されており、先古典期のモンゴル語文献の中で両方の字形が使われていることを示している。しかし、子音字 <n> と同様、この場合も点のある字形と点の無い字形の使われ方は文献によって異なる。『孝経』では子音字 <γ> は一貫して点の付かない字形が用いられているのに対して、『入菩提行経注釈』⁸では、子音字 <γ> は語中・語末で点を持つ字形の例が少なからずみられるが、点を持たない字形に比して数は少ない⁹。

『孝経』と同様、古典モンゴル語では、子音字 <n> と <γ> に点のない字形が使われており、点を持つとする Poppe (1954 : 20-21) の説明が当たらないことは既に述べた。これに関連して、嘎拉桑 yalasang (1979 : 663) は、19 世紀のモンゴル語伝統文法書《ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠪᠦᢉᠦᠳᠡ ᠲᠠᠶᠢᠯᠪᠦᠷᠢ ᠪᠢᠴᠢᠭ mongyol üsüg-ün bügüde tayilburi bičig (蒙文诠释)》¹⁰ の中で、<n> と <γ> の文字には点を付ける決まりはないが、ただ辞書や児童の教本ではやむなく点をつけて区別している、と書いている。これによって、子音字 <n> と <γ> に点をつけない字形は 17 世紀以降の木版仏典だけでなく、19 世紀のモンゴル文人にとって規範的な表記とみなされていたことが分かる¹¹。

3. 子音字 <s> の末位形として短尾 (boyni segül) の字形  が用いられている。例：



Poppe (1954 : 23) は、子音字 <s> の 2 種類の末位形 ( ) のうち、短尾の字形 (後者) は古風な書物 (ancient books) に用いられるとしている。しかし、むしろ「古典モンゴル語」で子音字 <s> の末位形として一般に用いられているのは  の字形である。先古典期の時代から、子音字 <s> の末位形には 2 種類の字形が用いられてきたが、『孝経』と同様、「古典モンゴル語」で <s> の末位形として通行していたのは短尾の字形である。

『孝経』で子音字 <s> の末位形に  の字形が用いられているのは、右の図に見る abs_a (37a1) 「棺」という語 1 回だけで、それ以外は子音字 <s> の末位形は上の例で見たようにすべて  の字形である¹²。



子音字 <s> の 2 種類の末位形 ( ) の用いられ方は文献によって異なるが、多く用いられ

⁷ 注 4 と同じ。

⁸ 注 5 と同じ。

⁹ 子音字 <q> に 2 点が付いた字形も少数であるが用いられている。字母表の子音字 <q> に 2 点の付いた字形を含めているのは道布 (1983 : IX) だけで、そこでは <γ> と <q> を同じ字としている。

¹⁰ 道光 15 年 (1835 年) の原序と道光 27 年 (1847 年) の再刊序をもち、北京嵩祝寺から木版出版された原本は現存しない。残存する写本を整理した筆写本が 1979 年に内蒙古人民出版社から出版された。

¹¹ 18 世紀に編纂・出版された数種類の清文鑑では、モンゴル文字の <n> と <γ> に点を付けた字形を用いているが、『欽定蒙文彙書 ᠮᠣᠩᠭᠣᠯ ᠤᠯᠤᠰ ᠤᠨ ᠪᠦᢉᠦᠳᠡ ᠲᠠᠶᠢᠯᠪᠦᠷᠢ ᠪᠢᠴᠢᠭ (mongyol-un üsüg-ün quriyaysan bičig)』(1891) では、<n> にも <γ> にも点のない字形が用いられている。これらについては栗林均 (2012) を参照されたい。

¹² abs_a (37a1) 「棺」の綴りで、語中スペースの前に  の字形が現れている点でも例外的な表記である。この点からしても、 の文字を <ba> と誤記した可能性も考えられる。

ているのは  の字形である。欽徳木尼 (2023) は先古典期のモンゴル語文献 29 種類を調査した結果、語末に子音字 <s> をもつ単語として、のべ 418 語 (異なり語数 84 語) のうち、 の字形をもつものは 362 語 (86.4%) であるのに対し、 の字形をもつものは 56 語 (13.2%) を数えるに過ぎないとしている (58 頁)。なお、語末の  の字形については、子音字 <š> の末位形とみなすべきものも含まれており、さらなる検討が必要と思われるが稿を改めて論じることにした。

4. 子音字 <č> と <j> の中位形は、字形の上で区別されない。

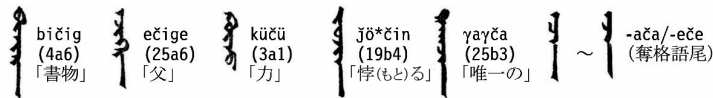
Владимирцов (1929: 74-75 § 20) は、16 世紀末まで使われたとする「ウイグル式モンゴル文字」では、語中で <č> と <j> の字形が同じ () になるとし、それと対比して 16 世紀末以降に使われたとする「モンゴル文字」の字母表 (71 頁) と例 (75 頁) では  <č> と  <j> という異なった字形を示している。Poppe (1954: 17) には  <č> と  <j> の中位形の字形が示されており、「先古典期モンゴル文字」の字母表 (26 頁) は、Владимирцов の字母表と同じものである。

『孝経』では、子音字 <č> と <j> の中位形には次のように様々な字形が用いられている。

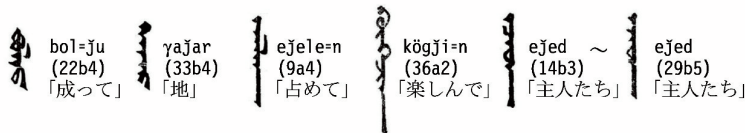


これらはいずれも子音字 <č> と <j> の中位形として用いられ、こうした字形の違いと子音字 <č> と <j> の使い分けの関係を見出すことはできない。

・子音字 <č> の中位形の例：¹³



・子音字 <j> の中位形の例：



上に見るように、『孝経』では      等の字形が <č> の中位形としても、<j> の中位形としても、取り混ぜて使われている。単語や語尾によって、いずれかの字形が使われる傾向は見取れるものの、それらは必ずしも一貫したものではなく、『孝経』では <č> と <j> の中位形は字形の上で区別されていないとみなすことができる。

*

*

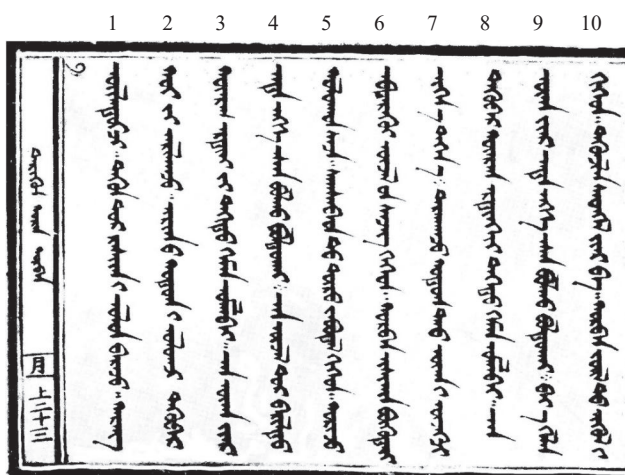
*

この節で見た 4 つの字形の特徴はいずれも現代語には見られないことから、「古いモンゴル文語」としての指標となりうるものである。ここでは『孝経』のモンゴル文語と古典モンゴル語に共通の特徴として示したが、これが古典モンゴル語の特徴として一般に共有されているかどうかは疑わしい。モンゴル文語の概説書として人口に膾炙している Poppe (1954) の説明は上に見た通りそれら

¹³ ローマ字転写の ö* は、第 1 音節の母音字 <ö> が母音字 <o> と同じ字形になっていることを表す。

を「古典モンゴル語」の特徴とみなしていない。それに加えて、同書中に掲げられているモンゴル文字表記の例も、1. 2. は点を持った字形、3. は  の字形、<č> と <j> の中位形はそれぞれ異なった字形で表記し分けられており、このことが誤った理解を助長してきたことは疑いない。

これらの字形に関する Poppe (1954) の説明が間違っていることは、まさに同書に掲げられている実例で直接確認することができる。同書36頁と37頁の間に“Page from a xylograph of the XVII century”として、次のような木版刷り仏典の版面の写真が挿まれている。「17世紀の木版本のページ」とあるように、典型的な古典モンゴル語の実例として掲げられたものである（画像の上の行番号は筆者による追加）。



Page from a xylograph of the XVII century (Poppe 1954:betw. pp.36&37)

ここで上記 1. 2. 4. の字形の実例を見ることができる。1. の例：3行目の ene ünen-iyer の ene および ünen で子音字 <n> は母音字の前で点がない。2. の例：4行目の bol=tuyai、6行目の yurban の子音字 <y> は母音字の前で点がない。4. の例：1行目の üiled=ü=gči、10行目の tegünčile=n の <č> の字形と1行目の bara=ju、7行目の tarqaya=ju の <j> の字形との間に違いは見いだせない。

- 点の無い <n> の例：

 ene(3, 4, 8行)  ünen(3, 7, 9行)

- 点のない <y> の例：

 yurban(6, 10行)  bol=tuyai(4,9行)

- <č> の中位形の例：

 üiled=ü=gči(1行)  tegünčile=n(10行)

- <j> の中位形の例：

 bara=ju(1行)  tarqaya=ju(7行)

なお、6 行目の下から 2 つ目の単語 (右図) は *niswanis* 「煩惱」で、母音字の前で点のない *<n>* が 2 回現れている他、語末の文字は *<s>* である。語末で「短尾の s」の代わりに普通の *orkiča* が書かれているのは誤刻の類であるが、古典モンゴル語で語末の *<s>* として使われているのが  の字形でないひとつの例にはなる。



3. *orkiča* と *čačuly_a*

ここでは、モンゴル文語の伝統で *orkiča* と *čačuly_a* と呼ばれている字形に注目する。

表 1. は、『蒙汉词典 增订本』(1999: 1515) に掲げられている「モンゴル族が 15, 16 世紀以前に使用していたウイグル式モンゴル文字」の字母表のうち、母音字 *<a>* と *<e>* の部分である。

表 1. 回纥蒙古文字母 *<a><e>*

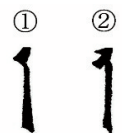
词 首	词 中	词 尾	拉 丁 转 写
			a
			e

母音字 *<a>* と *<e>* の字形は、単語の最初 (語頭) に書かれる「頭位形」を除いて、まったく同じである。ここで注意を払っておきたいのは、単語の末尾 (語末) に 4 種類の字形が示されていることである。道布 (1983: IX) にも同様に 4 種類の字形が示されているが、いずれもそれらの使い分けについては言及されていない。それらは、ひとつの文献、あるいは複数の文献の中で任意に交替する変種であろうか?あるいは、なんらかの条件によって使い分けられている字形であろうか?

『孝経』のモンゴル文語では、これらの 4 種類の字形がすべて使われており、それぞれの字形は単語の中の位置、および単語の書かれる位置 (外的な条件) によって明確な使い分けが見られる。

3-1. 2 種類の *orkiča*

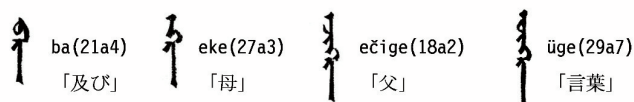
まず、表 1. の中の母音字 *<a>* と *<e>* の末位形の 4 種類の字形のうち、左の 2 つを右のように①と②とする。①の字形は、現代および古典式モンゴル文語では  の字形に相当し、これは伝統的に *orkiča* と呼ばれる。ここでは①と②の字形をともに *orkiča* と呼ぶことにする。



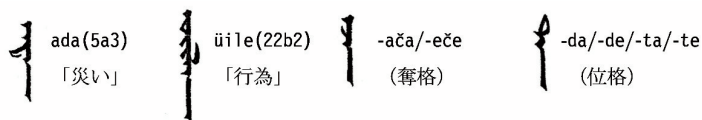
『孝経』における 2 種類の *orkiča* の使い分けは、明快である:

②は、語末の位置で *<ba/be><ke/ge>* という綴りの中で用いられ、①はそれ以外の語末の位置で用いられており、例外はない。

②の字形 (<ba/be> <ke/ge>) の例：



①の字形の例（語幹の末尾にも接尾辞の末尾にも現れる）：



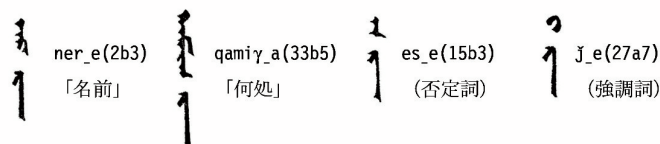
このような2種類の orkiča の使い分けは「古典モンゴル語」には見られない特徴である。

3-2. čačulγ_a

語末の <a/e> は先行する文字から離して書かれる場合がある。現代語および古典期のモンゴル文語では、離して書かれる <a/e> は、ㄣの字形となり、čačulγ_a と呼ばれている。

『孝経』で先行する文字から離して書かれる čačulγ_a に用いられているのは②の字形である。

例：



ここまで見てきたように、②の字形は語末の <ba/be> <ke/ge>、および語末で分離して書かれる <a/e> である。このように、母音字 <a/e> の末位形に①と②の2種類の字形があり、それらが単語の中の位置によって截然と書き分けられていることは、現代および古典期のモンゴル文語には見られない特徴である。

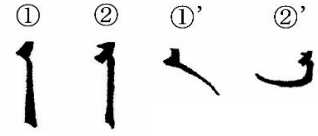
Kara (2005 : 119-121) には、13世紀以来様々な時代と地域で記録されたモンゴル文字の字形・字体が影印画像で集字されており、同書119頁には orkiča と čačulγ_a の字形・字体が60種類以上列挙されている。それらのひとつひとつに、出所文献の年代、地域名が付されていることから、字形・字体の違いは年代的、地域的なヴァリエーションとして示されていることが分かる。さらに Kara (2005 : 82-84) では、それらの字形・字体を字画（文字要素）に集約しているが、本稿で示した orkiča と čačulγ_a における字形の違いはそこに含まれていない。

Cerensodnom・Taube (1993 : 10) では、orkiča (čačulγ_a) の字形は2つの角（つの）を持つとあり、これは上記②の字形を指すものと考えられるが、①の字形に関する言及はない。

本稿では『孝経』のモンゴル語で orkiča と čačulγ_a の二つの字体が明確に使い分けされていることを示した。道布 (1983 : 212-413) における漢蒙対訳碑文6種のモンゴル文語の移録（模写）を見る限りそこでも2種の字形の書き分けが行われている。

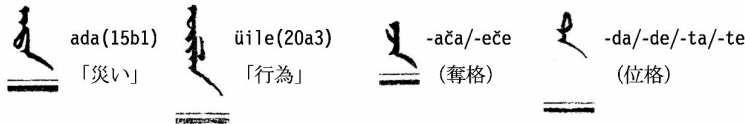
3-3. orkiča と čačulγ_a の交替形

次に、母音字 <a> と <e> の末位形の 4 種類の字形のうち、残りの 2 つについて見ることにする。それらを、右のように①と②に対応させて、①' と②' とする。



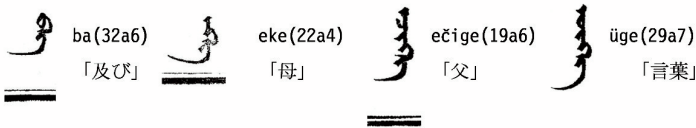
①' と②' は、それぞれ①と②の字形に対応するもので、それらは①と②を書くに足るスペースが十分にない場合に用いられる交替形である。主に行末に用いられることから、吉池孝一 (2006: 20) は「下端専用字」と呼んだ¹⁴。

①' の例 (単語とページ下端の枠線を示す) :

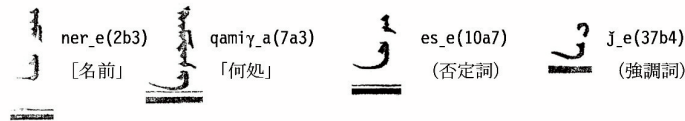


これらの例は、先に見た orkiča ①の例と同じ単語である。両者の字形を比較されたい。下端の枠線の直前で①' の交替形が書かれている。

②' の例 (前掲②の例と同じ単語) :



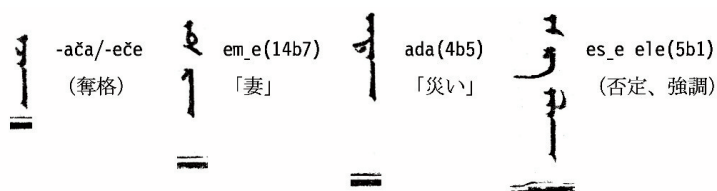
さらに、先行する文字から離して書かれる čačulγ_a についても下端の枠の上で②' の字形が使われている。例 (前掲②の čačulγ_a の例と同じ単語) :



なお、orkiča も čačulγ_a も、①' と②' の字形が書かれているのは、ほとんどの場合行末 (行の下端) であるが、一方で行末では必ずこの字形 (①' ②') が用いられている訳ではなく、スペースが足りていれば①と②の字形が用いられている。格語尾や es_e (否定詞)、j_e (強調詞) など、短い語はむしろ行末でも①と②の字形で書かれている方が多い。また行末の単語に限らず、そのひとつ前の単語でも①' と②' の交替形が書かれている場合がある (以下の最後の例)。

¹⁴ 吉池孝一 (2006: 17) では、「蒙文孝経の字母の研究には以下がある」として、1997年の研究会における栗林の口頭発表と論文 (栗林均 1997) を挙げている。栗林はそれに先立ち、1995年11月25日に愛知大学で開催された日本モンゴル学会秋季大会で「モンゴル語古訳本『孝経』における正書法の特徴」と題する研究発表を行ない、字母一覧表を含むレジュメを配布した。1997年の研究会の字母表 (資料の複写を切り貼りしたもの) は、これをそのまま再録したものである。また、同じレジュメの中で、orkiča と čačulγ_a についても「垂直に下に伸ばす字形と、水平に近く右または左方向にのぼす字形の2種類が現れるが、これらの書き分けは、完全にスペースに依存している」と指摘している。

・行末で①と②の字形が書かれている例：



『孝経』における母音字 <a> と <e> の末位形 (orkiča と čačulγ_a) の種類と使い分けは、次のような表にまとめることができる。čačulγ_a を **Separate** (分離形) の③③'とした。

表2. 母音字 <a> と <e> の字形 (まとめ)

Transcription	Characters			
	Initial	Medial	Final	Separate
a	①	◦	① ②	③
e	◦		①' ②'	③'

・説明

母音字 <a> と <e> の字形が異なるのは、**Initial** (頭位形) のみ¹⁵。他の字形はすべて同じ。

①②③は標準形。①'②'③'は、それぞれ①②③に対応する交替形で、行末等の小さいスペースに応じて用いられる (下端専用字)。

②②'は語末の <ba> <be> <ge> <ke> の中の <a> <e> として用いられる。

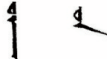
③③'は上の字と離して書かれる。それ以外は②②'と字形は同じ。

3-4. 子音字 <n> <d> および <g> <ng> の末位形

子音字 <n> <d> および <g> <ng> の末位形は、母音字 <a/e> の末位形と同様な字形 (orkiča ①) と交替形 (①') が見られる。子音字 <n> <d> の末位形は表3. にみるように、母音字 <a/e> の末位形 ①①' と同様の字画 (文字要素) をもっており、また子音字 <g> <ng> の末位形は表4. にみるように②②' と同様の字画を持っている。

¹⁵ 母音字 <a> の頭位形に <e> と同じ字形 (1 個の ačuy) をもつ語が 1 例ある : a*man-ača (7a1) 「口から」。また <e> の頭位形に <a> と同じ字形 (2 個の ačuy) をもつ語が 2 例ある : e*ng (2b6) 「最も」, e*mün-eče (34a1) 「前から」。ここでは、それぞれ a* e* と転写する。

表3. 子音字 <n> と <d> の末位形

Characters	Transcription
Final	
	n
	d

- 子音字 <n> の末位形（語幹末）の例：

 tabun(23b2) 「五」  tabun(13b7) 「五」

- 子音字 <n> の末位形（接尾辞）の例：

-yin（属格） -un/-ün（属格） -ban/-ben（再帰所属対格）

- 子音字 <d> の末位形の例：

 böged(22b3) 「及び」  böged(10a3) 「及び」  eġed(17b5) 「主人たち」  eġed(14a5) 「主人たち」

表4. 子音字 <g> と <ng> の末位形

Characters	Transcription
Final	
	g
	ng

- 子音字 <g> の末位形の例：

 biċig(4a6) 「害物」  biċig(15b5) 「害物」

- 子音字 <ng> の末位形の例：

 ċing(18b1) 「誠」  ċing(32b7) 「誠」

4. 子音字 <d> と <t> の字形¹⁶

13世紀から現代に至るまで、モンゴル文字には子音字 <d> と <t> に字形上の区別がない¹⁷。

『孝経』では子音字 <d> と <t> には次の表にみる字形が用いられている。

¹⁶ この節の内容は栗林均（1997）と重なるが、ここではモンゴル文字の字形をローマ字転写で論じている。ここでは影印によって字形を具体的に示すとともに表記法の原則を検討する。

¹⁷ 18世紀のモンゴル語古典文法書《ᠵᠢᠷᠦᠭᠡᠨ ᠤ ᠲᠣᠯᠲᠤ ᠰᠣᠳᠤᠷ ᠣᠷᠣᠰᠢᠪᠠ》(別名 ᠣᠶᠲᠠᠷᠦᠢ-ᠶᠢᠨ ᠮᠠᠨᠢ) では子音字の <d> と <t> を字形の上で区別して書き分けているが、普及しなかった。

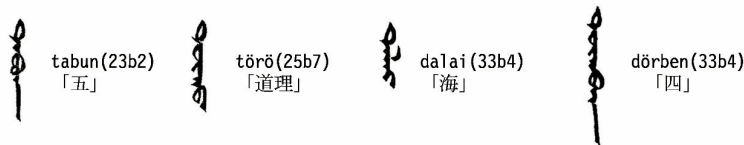
表5. 子音字 <d> と <t> の字形

Transcription	Initial	Medial	Final
t		①	
d		②	
			③ ④ ④'

4-1. 語幹内における <d> と <t> の字形

(1) <d> と <t> の頭位形

語頭位置では <d> も <t> も の字形である。字形から <d> と <t> を区別することはできない。
例：

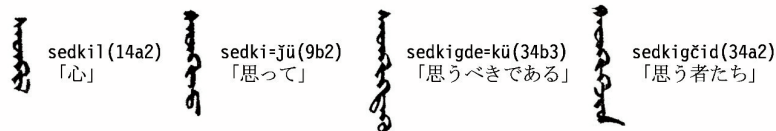


(2) <d> と <t> の中位形

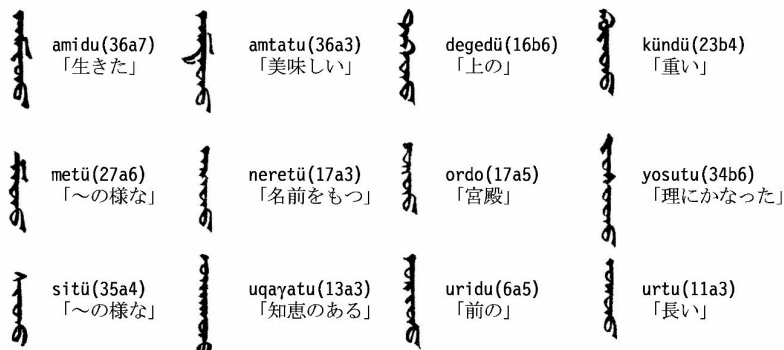
語中位置では ① と ② の2種類の字形が使われている。現代および古典期の正書法では、①は母音字の前（音節頭）に書かれ、②は子音字の前（音節末）に用いられている。これに対して、『孝経』では、以下に見るようにそれとは全く違った原理による使い分けがされている。

②の字形（）が使われているのは、次の2つの場合である：

1) 動詞 sedki=「思う」およびその派生語における子音字 <k> の前の <d>（全26回）



2) 語末の円唇母音字 <ö>（<o> <u> <ö> <ü>）の直前に位置する <d> <t>（全33回）



右の語は の字形が母音字 <a> の前に書かれており、上の原則 1) 2) の唯一の例外となっている。この語のローマ字転写は Rachewiltz (1982) によっているが、語の構成と意味は詳らかではない¹⁸。連続する <d> と <t> で同じ字形が重なるのを避けたものであろうか。

duradtai (37b4)

①の字形 () は②で示した以外の位置に使われている。「古典モンゴル語」では、母音字の前(音節頭)にだけ使われるが、『孝経』では母音字の前にも子音字の前にも用いられている。

- ・語中で子音字の前 (= 音節末) に使われている の例 (全 23 回) :

üiled=besü (30a5) 「行えば」
 todqor (15b2) 「障碍」
 idqa=qu (31a2) 「諫める」
 čimad=qu (7a5) 「恨む」

- ・語中で母音字の前 (= 音節頭) に使われている の例 (全 428 回) :

adali (23b6) 「同じ」
 uridus (33a6) 「祖先」
 dotor_a (16b3) 「中」
 amitan (16b3) 「生きもの」

(3) <d> と <t> の末位形

語末の位置では、上掲の表 5. に見るように <d> の文字として ③ ④ ④' の 3 種類の字形が用いられている (<t> の文字は語末には現れない)。③ の字形が用いられているのは eD「物品」という語 (2 回) だけである (この字形をローマ字 D で転写する)。子音字 <d> の末位形の④は一般に用いられる字形で、他方④' は行末に十分なスペースがない場合に書かれる字形である (既出: 3-4. を参照)。

- ・ <d> の末位形の例 :

eD (30a5) 「物品」
 eġed (17b5) 「主人たち」 ~ eġed (14a5) 「主人たち」

¹⁸ 哈斯额尔敦 (2022 : 141) は duradunai と転写して、「nai の語尾は不明」としている。

4-2. 接尾辞頭における <d> と <t> の字形について

『孝経』には、<d> あるいは <t> で始まる接尾辞に次の種類がある。

表6. <d> <t> で始まる接尾辞

	与位格	位 格	奪 格	再帰所属		
				与位格	位 格	奪 格
字 形						

『孝経』ではこれ以外の形をもつ交替形は存在しない。以下では、それぞれの接尾辞について見ていくことにする。

(1) 与位格接尾辞

現代および古典期の正書法では、与位格の接尾辞には (-dur/-dür) と (-tur/-tür) の2種類の形があり、これらは語幹末の文字の種類によって書き分けられている。これに対して、『孝経』では語幹の種類に関わりなく というひとつの形だけが用いられている（全72回）。

例：

	dalai-d'ur(33b4) 「海に」		qan-d'ur(8b4) 「王に」		eke-d'ür(22a6) 「母に」		sedki1-d'ür(35a4) 「心に」
	čay-tur(37b4) 「時に」		ulus-tur(13a3) 「国に」		bičig-tür(22a6) 「書に」		ešed-tür(14b3) 「主人たちに」

『孝経』で語幹の種類に関わりなく の字形が使われているのは、どのような発音を反映したものであろうか？ 現代および古典モンゴル語の与位格接尾辞の頭位では、それが付く語幹末の音の種類によって と が書き分けられており、それぞれが t と d という音を表している。これに類比すれば、『孝経』の与位格接尾辞頭の も t の音（だけ）を表していたのではないかと考えても無理はない。これにしたがえば、『孝経』では語幹の種類にかかわらず与位格接尾辞頭の子音は t だけで、d は無かったことになる。

一方で『孝経』の与位格接尾辞頭の発音を知るうえで『元朝秘史』のモンゴル語で与位格接尾辞頭の子音に t と d の交替があったという事実は全く別の判断材料となる。つまり『元朝秘史』では単語の末尾が母音および子音 n, ng, l, m で終わる語幹には与位格接尾辞の「都^𐰺兒・突^𐰺兒 (dur/

dür)」が付き、単語の末尾が子音 b, d, γ, g, r, s で終わる語幹には「途^{ᠲᠦ}児・圖^{ᠲᠦᠷ}児 (tur/tür)」が付くという書き分けが行われているのである¹⁹。この状況は現代語および古典モンゴル語の正書法に符合している。

この事実を勘案すれば、『孝経』が作られた時代のモンゴル語でも、単語の末尾の音に応じて与位格接尾辞頭の子音に t と d の区別があったとみなすのが自然であろう。つまり『孝経』の与位格接尾辞頭の  は、ひとつの字形で t の音も d の音も表していたと考えることができる。これは単語の語頭で  の字形が t と d の音の両方を表していたのと同じ扱いである。

この考え方は Ligeti (1972) や Rachewiltz (1982) のローマ字転写にも反映されている。Ligeti (1972: 76-104) のローマ字転写では、上掲の上位 4 語のモンゴル語の例は、dalai-tur (33b4), qan-tur (8b4), eke-tür (22a6), sedkil-tür (35a2) となっている (下段 4 語のローマ字転写は上の例に付したものと同一)。ローマ字転写方式の *t* は、「単語の中、および接尾辞頭において "d" の音価をもつウイグル文字の "t"」と説明されている (10-11 頁)。つまり接尾辞頭では d の発音をもつ  の字形を指している。Ligeti (1972) はどのような環境で *t* が現れるか、明示的に示していないが、同書のローマ字転写の実例を見れば、現代語および古典モンゴル語と同様に「単語の末尾が母音および子音 n, ng, l, m で終わる語幹」に付く場合であることが分かる。

一方、Rachewiltz (1982) のローマ字転写では、上の語は、それぞれ dalai-dur (33b4), qan-dur (8b4), eke-dür (22a6), sedkil-dür (35a2) となっている (下段 4 語のローマ字転写は上の例に付したものと同一)²⁰。これは、字形とは関わりなく音を写したものであるが、与位格の接尾辞頭において d で転写されているのは、現代語および古典モンゴル語と同様な場合である。

与位格接尾辞に  という字形だけが用いられているのは、『孝経』にとどまらない。栗林均 (1999) では、『孝経』以外の 13・14 世紀の漢蒙対訳碑文、イル汗国王の書状、トルファン出土の入菩提行経注釈等 16 種類の文献資料を調査して、それらに現れる与位格接尾辞 242 回のすべてが  であることを指摘した。これによって、与位格接尾辞として  というひとつの字形だけが使われていたことは先古典期モンゴル文語に通行していた正書法とみなすことができる。

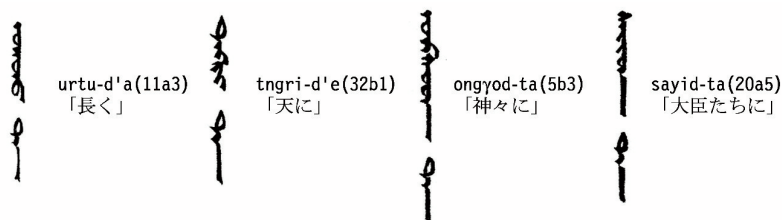
与位格接尾辞として  の形だけが使われているのは、それをひとつの単語と同じように独立した単位として扱っていたためではないだろうか。表 6. で見たように、ひとつの接尾辞は基本的にひとつの形で表されている。 という字形が単語の語頭位置にある場合、t と d が区別されない (t も d も表す) ように、与位格の接尾辞頭の位置でも  の字形は t と d の区別なく用いられていると考えられる。つまり、 はひとつの単語と同様に扱われており、その頭位にある  という字形は t と d のいずれも表わしている。字形だけで t と d のいずれかを判断できないのは単語の語頭位置における状況と同じである。

¹⁹ 村山七郎 (1961) はこれを「語末音決定原理」と呼んだ。栗林均 (2002) では、それに加えて漢語傍訳の意味も与位格接尾辞の書き分けに関係していることを示した。

²⁰ 栗林均 (2014) のローマ字転写は Rachewiltz (1982) の方式に基づいている。『孝経』に関しては与位格接尾辞の字形はひとつだけであり、字形の違いを示す補助符号は必要ないという考え方もありうる。

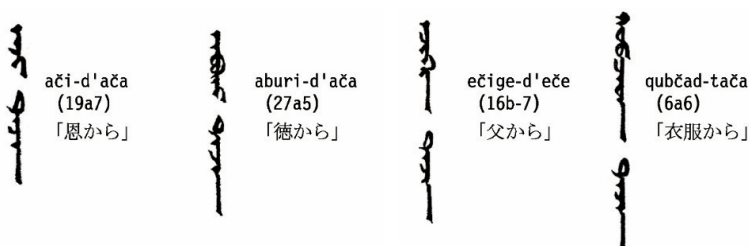
(2) 位格接尾辞

位格接尾辞としては、語幹の種類に関係なく  という一種類の形が用いられている（全 8 回）。
例：



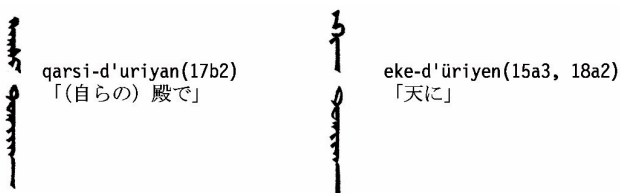
(3) 奪格接尾辞

奪格接尾辞としては、語幹の種類に関係なく  という 1 種類の形が用いられている（全 5 回）。
例：



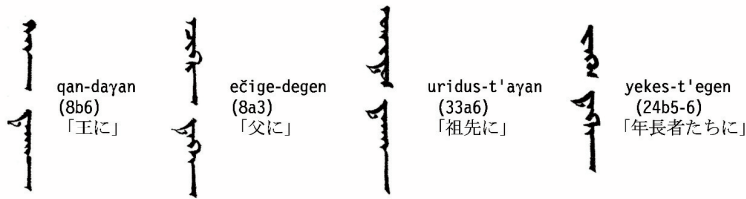
さらに、<d> あるいは <t> で始まる再帰所属の接尾辞には、次のようなものがある：

(4) 再帰所属・与位格接尾辞には  という形が 3 回、すべて母音字で終わる語幹に用いられている。
例：



いずれも  の字形で始まる(1)～(4)の接尾辞は、語幹の種類（語幹末の文字）に関係なく、ひとつの接尾辞はひとつの形で表されている。これらの接尾辞頭の  は独立した単語における子音字 <d> <t> の頭位形と同様の扱いで、t と d のいずれも表すと言うことができる。

(5) 再帰所属・位格接尾辞には男性語の語幹に  (9 回) と、女性語の語幹に  (13 回) という形が用いられている。例：



この接尾辞は  の字形で始まっているが、上の例にみるように <e>、<n>、<s> で終わる語幹に接尾していることから、d の音も t の音も表していると考えられる。(子音字 <d> <g> <y> <r> <s> で終わる語幹に付く場合、ローマ字で t' と転写する。) 接尾辞頭の  は「語頭」とみなされるのに対し、この接尾辞が  の字形で始まっているのは、「語中」とみなされているためではないだろうか。この接尾辞には男性形 (-dayan/-tayan) と女性形 (-degen/-tegen) があり、それらが母音調和によって語幹の母音と呼応して交替することから、語幹とのつながりが一層強く意識されていたのであろう。この場合、語幹から離れてはいるものの、<d> <t> の中位形として  が書かれていると考えることができる。この場合も、字形だけでは <d> <t> のいずれであるか判定することはできない。

(6) 再帰所属・奪格接尾辞としては  という形が 1 回現れる。例：

この接尾辞も、 という字形で始まっているが、(5) の場合と同様、「語中」に準じた正書法で、接尾辞頭の  の字形は子音字 <d> <t> の中位形の扱いとみなすことができる。『孝経』には女性語に付くこの 1 例しかないが、男性語に付く -dačayan/-tačayan という形も潜在的に存在していると考えられる。



繰り返すことになるが上に見た再帰所属の位格および奪格の接尾辞頭の  の字形は単語の中位形と同じ扱いを受けていると考えられる。それらは、<d> と <t> のいずれをも表すが、<d> <t> のいずれであるかは、字形から判断することはできない。

現代および古典期のモンゴル文語の正書法では、<d> <t> で始まる接尾辞は語幹末尾の文字 (= 音) によって接尾辞頭の文字  と  が交替するが、これは接尾辞頭の発音の違いを反映したものである。これに対して、『孝経』をはじめとする先古典期モンゴル文語における与位格の接頭辞頭の  と  の字形は発音の違いを反映したものではなく、ひとつの接尾辞をひとつの形で表すという独自の正書法の原理で綴られている。

5. 小結

『孝経』のモンゴル語は、典型的な先古典期モンゴル文語とみなすことができる。そこには現代のモンゴル文語と比較して多くの「古風な」字形の特徴がみられる。本稿では、それらの特徴のうち、まず古典モンゴル語と共通の次の4点を指摘した：1. 子音字 <n> は点をもたない。2. 子音字 <γ> は点をもたない。3. 子音字 <s> の末位形は「短尾」の字形をとる。4. 子音字 <č> と <j> の中位形は字形で区別されない。Poppe (1954) で、上の1. 2. 3. を「古風な」字形としていることは先古典期モンゴル文語の特徴と通じるが、それらを古典モンゴル語と切り離れた別の特徴としているのは間違った記述である。4. についても古典モンゴル語で別の字形として扱っているのは正しくない。同書にモンゴル文字表記の例として挙げられている単語はこうした説明に合わせた字形で綴られているが、古典モンゴル語の実態を反映したものではなく、学習用に補整した字形として理解するべきであろう。

一方で、古典モンゴル語とは異なる『孝経』のモンゴル文語に特有の字形として、1. orkiča に2種類の字形があり、語中の位置によって書き分けられていること、2. orkiča と čačuly_a の交替形（横線の字形）が行末のスペースに合わせて用いられていること、3. 子音字 <n> <d> および <g> <ng> の末位形にも orkiča と同様な字形、およびそれらの交替形に対応する字画が用いられていることを例証した。orkiča と čačuly_a の交替形（横線の字形）は、古典モンゴル語では orkiča の一般的な字形として用いられている。先古典期のモンゴル文語の縦線の orkiča と čačuly_a の字形が時代とともに横線の字形（交替形）に取って代わられたのは、文書が扱う情報量の増加に適応したものではないだろうか。orkiča と čačuly_a の縦線の字形を横線の字形（交替形）にするだけで1行に収まる単語の数は倍増する。限られたスペースの中でより多くの分量の単語を収めることができる字形の使用の範囲が拡散していったことは想像に難くない。

『孝経』のモンゴル文語で、現代および古典モンゴル語の正書法と著しい違いがみられるのは子音字 <d> と <t> の字形と正書法である。現代および古典モンゴル語では  の字形は単語の語幹内（語中）で子音字の前、つまり音節末に用いられるのに対し、『孝経』では  の字形は1) 動詞 sedki = 「思う」とその活用形・派生語、および2) 語末の母音字  (<o/u/ö/ü>) の前に用いられている。動詞 sedki = 「思う」とその活用形・派生語についてみると、現代語と古典モンゴル語で  の字形が使われているのは、『孝経』の正書法を継承しているとも見ることができ、その価値は同じでない。前者は「子音字の前（音節末）」という環境に対応した現れであるのに対し、後者は sedki = 「思う」という特定の語彙に対して適用されている字形だからである。さらに『孝経』で  の字形が語中で母音字の前だけでなく子音字の前にも用いられていることと合わせて、現代および古典モンゴル語とは全く異なった書き分け規則が存在していたとみなすことができる。

さらに、接尾辞頭では、語幹末の文字（＝音）による字形の交替はなく、単語の頭位形（）あるいは中位形（）としての字形が用いられている。それは、発音に関係なく、ひとつの接尾辞にひとつの形をあてる方式であり、『孝経』に具現されている先古典期モンゴル文語に特徴的な正書法とみなすことができる。

